

5. 最近経験せる骨軟化症の骨変化について

湯山 琢夫, 井上駿一, 後藤澄雄
 小沢 俊行, 森川嗣夫
 (千大・整外)

中島 博徳 (千大・小児)

栗原 真 (川鉄・整外)

大木 健資 (君津中央・整外)

石川 正士 (桜之宮病院・整外)

霜 礼次郎 (霜整形外科)

川瀬 幹雄 (国立国府台・整外)

小林 健一 (松戸市立・整外)

我々は最近7年間に経験したくる病および骨軟化症のうち、組織学的検討の機会を得た11例について、骨変化を中心に報告した。これらの症例を検討することにより、低リン血症性くる病にもさまざまな程度が存在し、治療によく反応するものと抵抗するものがあることを再確認した。また低リン血症性くる病の放置例2例に、ともにハイパーオストーシスをきたしている点は興味深かった。成人発症の低リン血症性くる病例では、 αD_3 投与によりアルホス・リン値の改善なしに臨床症状が改善している点が目をひいた。さらに RTA による骨軟化症例では、全身にみられる多発性骨折と骨組織にみられる激しい変化が印象的であった。これらの検討の過程で、くる病の骨質そのものの改善が非常に重要であると痛感したことであった。

6. 骨代謝におよぼす力学的因子の影響について

(Bone dynamics からみた脊椎前後彎変形)

後藤 澄雄, 井上駿一, 栗原 真
 小沢 俊行, 山懸正庸
 (千大・整外)

霜 礼次郎 (霜整形外科)

骨組織は吸収と形成の機序により常に改変を行っている。その場合発育期では骨皮質表面の改造を伴い外形的变化(モデリング変化)をきたす。一方成熟後では海綿骨と皮質内部での改造が主体である(モデリング)。これらに影響する因子としてホルモン、Ca 代謝との関連は重要であり臨床上的興味は大きい。

しかし同時に骨の改変には力学的因子の関与も大きく、骨変形の進行、矯正を考える上で無視できない。我々は従来より脊椎骨の代謝、変形に関与する力学的要因について研究しているので、現在までに得た知見の一部を総括的に述べた上で、逆に力学的因子の影響が Ca 代謝にどう関与するか今後の課題として展望したい。

特別講演

血液カルシウム恒常性とカリシウム代謝ホルモン

東京大学医学部第4内科 尾形悦郎教授